

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No. 7

1964
昭和39年第16組の特伝打ち合せ
風景(1964年教学通信)真宗同朋会運動三本柱
特別伝道はいかに展開されたか

真宗同朋会運動のいわゆる三本柱として位置づけられた教区指定奉仕団、特別伝道、推進員認定研修会。この三つの施策はバラバラに実施されたのではない。従来の総花的事業的研修方式では人の誕生に資することはできなかったとの反省に立つて、一貫して集中的に修道的方式をもって行われた。運動発足時、宗派は九教区を指定。さらに教区内の数カ組を指定して、集中的に二年乃至三年、根

が生えるまで三本柱が実施された。北海道教区は、宗派の第一次指定を受けなかったが、教区独自に指定組を設定して運動に即応していった。

その指定を受けたのが、北第三組、第十六組、第十九組である。故・元氏義照氏(第十九組満願寺)は、その当時に回顧して、

特伝を受けたことを、「北海道に同朋会運動が根付いた基だ」と思う」と語る。特伝は、壮年層で寺

院に参らない人というターゲットが作られた。

*

特別伝道はいかなる施策であったのか。1962年(昭和37)十二月号の『真宗』に特集された「真宗同朋会運動―住職の手引き―」には、特別伝道は一年度内に同一組に対し二回実施し、講師・随員は宗務所より派遣すると述べられている。その方法は、役割分担などの緻密な打ち合わせの上、一日一カ寺一会所として五日乃至七日間実施し、参加者は将来中心になる方が願われている。

その中で義務付けられていたのが、住職・坊守の終始出席である。

さらに特別伝道実施前には、原則として住職と坊守は指定奉仕団として上山。最初の特別伝道が終了すれば、壮年・婦人の指定奉仕団が行われていく。壮年を対象として、まず寺に住まいする者が自らの態度をもって示すことが不可欠とされていた。

*

北海道教区では、1964年(昭和39)の『教学通信』に、「特別伝道に現れた問題」を取り上げている。

「参加者の年齢層が高く、婦人層の参加が少ない。活動力の旺盛な青壮年婦人層の参加が多くなる」ことが望ましい。現代の聖典は大変よい。この種のテキストの続刊を望む。新興宗教の勧誘をうけた例は比較的少ない。よく参詣している人で他の宗教を信じている人がある」等々の講師の所見、参加者のアンケートが掲載されていた。婦人会定例が実施されていた北海道教区において、婦人層の参加が少ないというのは意外であったが、聖教に対する直接的な学びが求められ、新興宗教が強く意識されていたことが見て取れる。

*

その後、教区指定を受けた三カ組は本山指定を受けて、さらに運動を展開していくことになる。発足当時の運動は、対象別に多彩な研修会を立てていくのではなく、戦略をもって集中・継続ということに力が注がれていた。

北海道教区は、これらの取り組みを背景に、全国の約四割にあたる前期教習修了者を誕生させることになる。